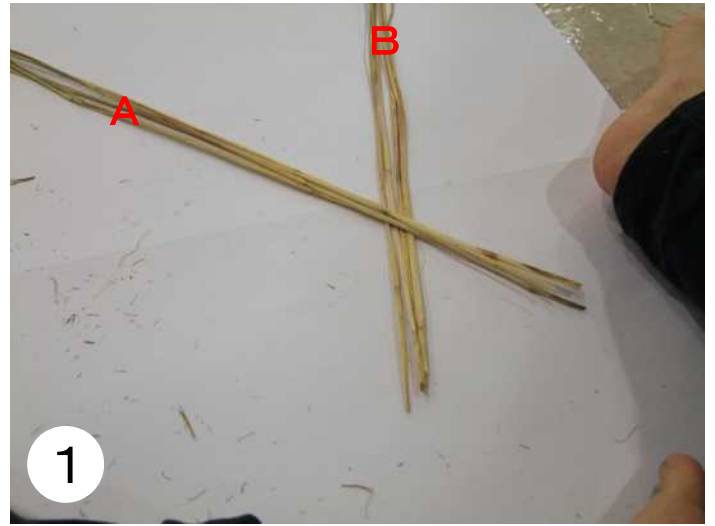


ゼロからはじめるワラ仕事

秋田県立博物館 工芸部門

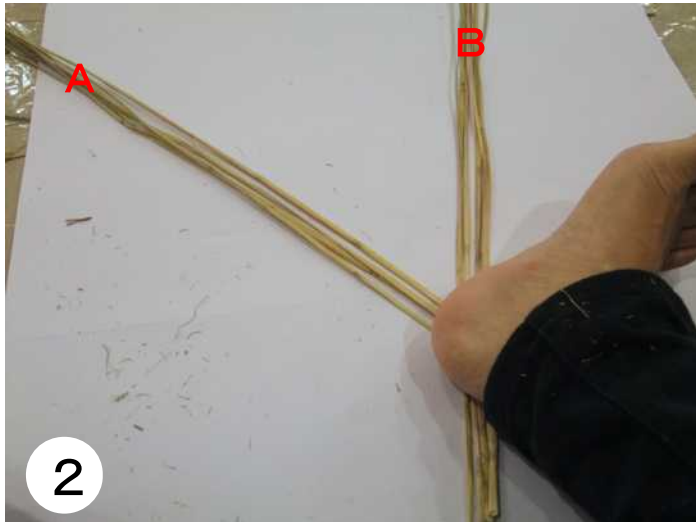
なわ な 縄を綯う

2つのワラの束を同時にねじり、ねじりと逆方向にからみ合わせると、ねじりが戻ろうとする力で、2つのワラの束はしっかりとからみあい、縄になる。

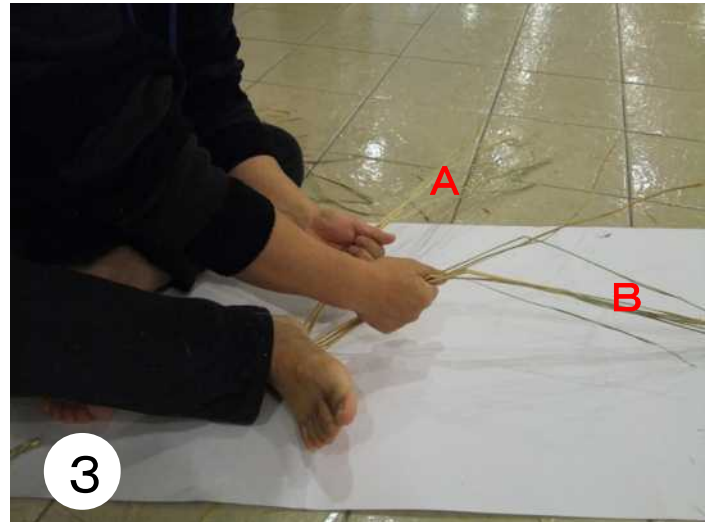


1 同じ量のワラの束を2つ作る。この場合は太いの細いの取り混ぜて4本ずつ。

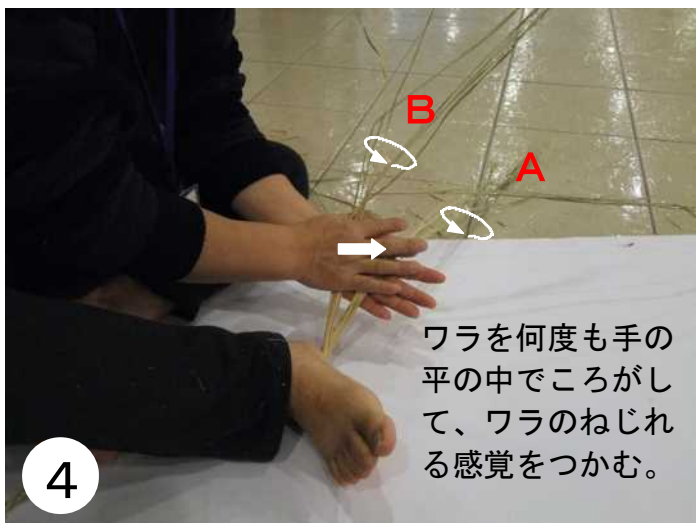
ワラはシベを取り除き、下端に節があるときは折り取って、元を細くしておく。



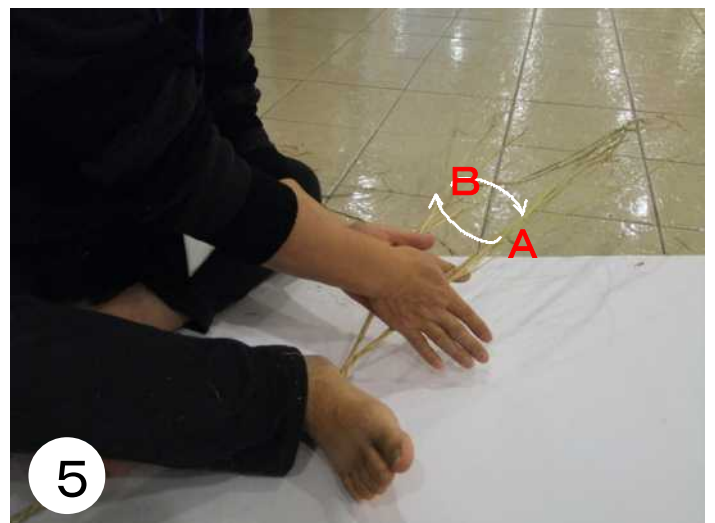
2 2つのワラ束の元を重ね、足で押さえる。



3 左右の手でひとつずつワラの束をつかみ、右手のワラBを手前に、左手のワラAを向こうにして、混じらないように2つに分けて、手のひらで挟む。

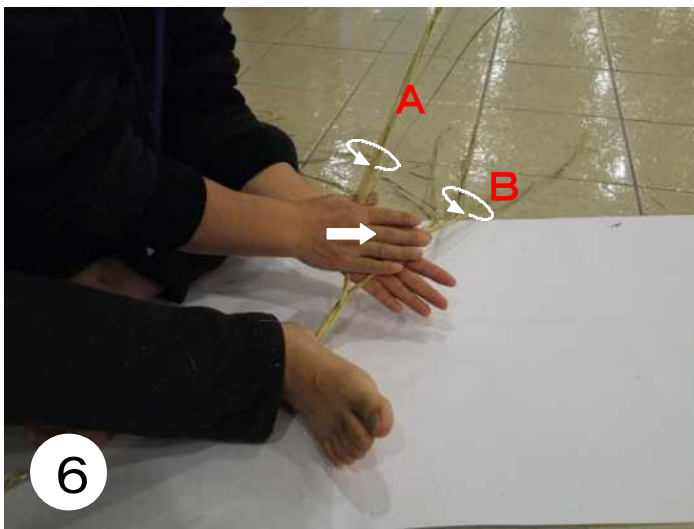


4 ワラを何度も手の平の中でころがして、ワラのねじれる感覚をつかむ。

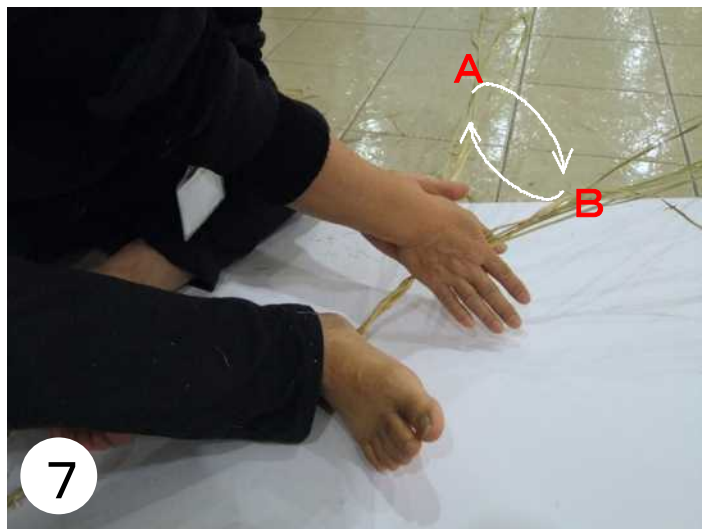


5 手のひらを擦り合わせて、自然に右手で先のAのワラ、左手で手前のBのワラをつかみ、Aの束をBの手前にもってきて手のひらではさむ。(ABのワラは半回絡み合う)

手のひら同士をしっかりと押しつけて、右手を前方に押し出しながら擦り合わせる。この時A Bのワラは同じように捻られなければならない。(調子よくねじれるまで練習するべし!)



4と同じように、手のひら同士をしっかりと押しつけて、右手を前方に押し出しながら擦り合わせる。



5と同じように、手のひらを擦り合わせて、自然に右手で先のBのワラ、左手で手前のAのワラをつかみ、Bの束をAの手前にもってきて手のひらではさむ。



この工程を繰り返して、縄を絞う。



ウラ（葉先のほう）までしっかり絞う。ひっくり返して元の方も絞っておく。

ワラを継ぎ足して絞う



縄が細くなり始めるところまで縄を解く。
足すワラを準備する。足すワラは、節が元にあるものは折って葉を取り、元を細くしておく。



解いた縄先はをさばいて、足しワラを混ぜる。太さが変わらないように、ずらして混ぜる。この時、足しワラの節が同じ位置に重ならないように調節する。節が重なると弱くなる



12

足しワラを重ね合わせたところ。2つのワラ束の長さが違う時は、別々にずらして足しワラをする。編んでみて、太さが合わないときは解いてやり直す。



13

足したワラがばらけないように慎重に編み合わせていく。



14

太さが合わないときは、解いて、さらにワラを足したり、余分な葉をむしったりして調整して編み直す。



15

必要な長さになるまで、ワラを足しながら編む。編んでいる途中に、時々、縄を捻り戻して絡みを強くする。



16

できるだけ、はみ出さないように足した方がよいが、はみ出した部分は、むしるか、はさみで切り取っておく。

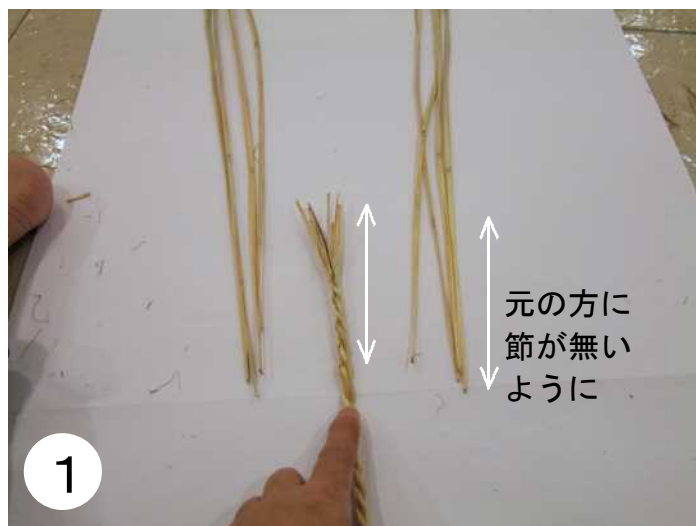


17

編み終えた縄は、強い撚りを与えてから、ワラで擦って磨く。磨きワラはワラを選った時に取ったシベを束ねて編み合わせたものを用いる。(これはココリ、コスリなどと呼ばれる)

元と元を継いで 縄を綯う

普通、縄はウラ（葉先）に元を継ぐが、ワラジなどの履き物を編む芯にする縄は、元と元を継ぎ、そこを中心に二方向にウラに元を継いで綯った左右対称な縄が使いやすい。



ワラ4本程度ずつで縄を綯い、元の方の細くなり始める位置を確認し、足しワラを準備する。元に節があって太いものは、折って節と葉をとり、細くしておく。



ワラ4本程度ずつで綯った縄の元の方を細くなり始めるところまで解く。



太さが均一になるように、足しワラを混ぜる。



太さの調整がうまくいかないときは、何回かに分けてワラを足す。



元と元を継いだところ。左右対称にワラを足して綯い、必要な長さにする。

元と元を継ぐと強度は弱くなるが、爪先にくるので、大丈夫。この理由がわかれば一人前。